

開館 35 周年記念 美術館につとめてみたら …………… ②

第2弾は、開館 10 周年の頃から約 25 年当館で学芸員を務め、現在はチームリーダーとしてみんなをまとめてくださっている平野学芸員と梅津学芸員の対談です。



左：平野学芸員主任(1991年より勤務)
右：梅津元主任学芸員(1991年より勤務)

ー開館は 1982 年なわけですが、その頃から、埼玉県立近代美術館に勤める頃まではどのように過ごしていましたか。

平野 開館当初は高校 2 年生で、暇な時間は音楽に関わる一方で、美術にも結構興味がありました。大学 3 年生くらいから画廊めぐりを始めて、ギャラリー NW ハウスという画廊でアルバイトをしました。そこで森村泰昌さんや中村一美さん、批評家の方たちなどとお話できたことは貴重でした。

梅津 開館の頃は高校 1 年生で、音楽ばかり聞いていました。美術大学の芸術学科に入学後、画廊めぐり

りも始めてよりリアルに現代美術の世界を知りました。大学院に進んだ頃、当時原宿にあったハイネケンビレッジギャラリーの手伝いもするようになり、菅木志雄さんや中原浩さんの展示の手伝いやトークの裏方をやったりしました。平野さんが行っていた NW ハウスも重要な場所だったので一生懸命通っていました。平野さんはたぶん、逆にハイネケンビレッジに来てくれたんじゃないでしょうか。

平野 ハイネケンビレッジのレクチャーシリーズとかね。日本でも美術館で美術史的な展覧会を見ることは出来たんですけど、コンテンポラリーアートに関しては、やはり画廊やオルタナティブスペースでしか見られなかった。そういうところに私も梅津さんも、引き寄せられていったという感じですね。

ーでは、美術館にいらした当初くらいのことはいかがですか。

平野 入ったときは、92 年に 10 周年を迎えるにあたって、購入に関しても展覧会に関しても大きな話がありました。学芸員の最初として大きな経験が出来たと思っています。

梅津 展覧会に限らず、上映会や講座に関してもやりたいことを実現できる面白さに気がつきました。2 代目館長の田中幸人さんは、若いスタッフにどんどんやれと発破をかけてくれて。早いうちに平野さんも私も自主企画展をする機会を得られて、すごく刺激がありました。*1

平野 初代の本間館長の時代から、自主企画展の割合が多かったんですよ。

梅津 自由なテーマで展示することは、埼玉の特徴でした。もちろんベーシックな基礎調査があってこそなんですけど、そこにとどまるものではなく自由な発想でやっている美術館だということはずごくよかったと思います。

ーそこから 25 年以上埼玉近美で仕事をして、今の思いをお聞かせください。

平野 いま、若い世代の学芸員が加わったのは非常に刺激になります。若い方は、考え方というか、感性も含めて違う部分を持っているので、そこをうまく美術館の中に活かしていければ、21 世紀を乗り越えられるんじゃないかと思っています。

梅津 その人なりのキャラクターを活かしてほしいなと思います。美術館の仕事として、喜びを見出しているのは、デザイナーと試行錯誤したり手探りでやりながら展覧会のカタログなど印刷物を作ること。カタログは展示の記録や研究成果にとどまらず、展覧会という出来事を、展示と別な次元で実現する重要な存在です。最後に、埼玉近美はどのような特色の美術館だと思われませんか。

梅津 埼玉県立ですが、インディーズっていう感じがありますね。手作り感という意味で。それほど巨大じゃない美術館で、自主企画重視なので、自分たちで作っているっていう感覚ですよ。

平野 大規模な美術館じゃないというところが利点です。この美術館は中規模くらいなので、何か試みるときにそれほど大きなリスクを伴わないでユニークなものを打ち出しやすい。このサイズ感は今後も意識してやっていきたいと思っていますよ。

梅津 基本的にどんなことでも自分たちで考えて、実行に移せるっていうのかな。例えば、ニュー・ヴィジョン・サイタマも、93 年に立ち上げて、20 年以上かけて第 5 弾まで続いています。*2 やり方も緩やかだし、そのへんのフレキシブル感は、埼玉近美っぽい感じですよ。大量動員の新聞社マスコミ系がある意味で王道とか、美術業界のメジャーだとしたら、やっぱり自主企画とか、インディーズなんですよ。

平野 インディーズと同時に、例えば上野や六本木の美術館のオルタナティブとして埼玉があるのかもしれないですね。

梅津 資本的にもエリア的にも東京中心に王道があるとしたら、それに対する批評精神、対抗精神、そういうのに負けないぞという「意志と意地」、インディーズの精神が流れています。こっちのほうが面白いだろ、みたいな。そういう感じはどこかにあるかもしれないですね。

*1…それぞれ、1994 年に、以下の自主企画展を担当。「短形の森ー思考するグリッド」(平野学芸員)、「くつつすこと」とくみることー意識拡大装置ー」(梅津学芸員)。

*2…「ニュー・ヴィジョン・サイタマ」は、埼玉ゆかりの現代作家をその時々テーマ、形式で取り上げる当館の展覧会シリーズ。これまで 1993 年、1998 年、2007 年、2011 年、2016 年に開催している。

聞き手：Y.S.



開館 35 周年記念 美術館につとめてみたら …………… ③

続いて、渋谷学芸員、吉岡学芸員、大浦学芸員の鼎談です。2000 年代に入ってから当館に勤め始めた 3 人に、「中の学芸員」として普段感じていること、美術館のこれからについてなどを語っていただきました。

渋谷 私は専門がフランス絵画なので、入る前は、埼玉県立近代美術館についてはモネを持っていて「印象派とその時代」みたいな展覧会をやるところ、というふうに認識していました。お二人はいかがですか。

吉岡 わたしは最初に就職した場所なので、育ててもらった、みたいな感じがあります。それから、このコレクションは通史的というよりも本当にうちの県でしか持っていない埼玉ゆかりの作家をたくさん持っていて、当たり前だけど重要な特徴だと思っています。

大浦 ぼくはここに入る前から、平野さんと梅津さんのインタビューにあった「オルタナティブ」という特徴を、展示を通して感じていました。それは、学芸員の個性や矜持、プライドによるものだと思うんですけど、中に入れてみて、自由な発想を受け入れて後押ししてくれるという空気感がありますよね。例えば展示室に 2 トンの土を運ぶとか。*1 作家から出てきたアイデアに対して、美術館が許せるレベルまでもっていくためにどうするかっていうのを、こちらの意図を汲んで考えさせてくれる。

渋谷 遠藤利克展もまったく同じように、実現に向けて工夫していきました。*2

大浦 館の仕事の進め方として、出てきたものに対して、これはやれないと最初から突っ返すことはあんまりないですよ。それから、建島さんが館長に就任してから雰囲気が変わったんじゃないかなと想像しています。建島館長が就任したのはぼくが入る 1 年前ですよ。

渋谷 美術を専門としている館長が週に 1 度でも来て、購入なり展覧会の内容なり、その方向性について、バシッと言ってくれる方がいて助かります。専門家がリーダーシップをとってくださるのはとても大きいです。

吉岡 雰囲気として、わたしが入った時は今以上に予算の厳しさについて聞いていた記憶があります。でも建島さんがいらして、世の中の動きもあると思うんですけど、予算も少しずつ通るようになって、企画展の選択肢とかも増えてきたのかなという感じがしています。わたしが担当した展覧会は、うちのコレクションを活用した企画展が多いです。今度の「駒井哲郎 夢の散策者」展もうちのコレクションが中心。そういう展覧会をすると、コレクションに関する最新の情報が得られるし、周りの情報もわかってくる。個展でも、一人の作家を調べていると、その作家に関するいろんな情報や新しい資料が集まってくるので、そういうのを少しずつ勉強したり、展示として紹介したりする仕事は続けていきたいなと思います。

渋谷 私は入って担当した展覧会が、サブカルチャー的なものやアウトサイダー系のものでした。上の世代がやっていないこととか、手を付けていないことをやった感じがします。一番最近の遠藤利克展については、やっぱり、自分で言い出して自分でやれたので満足感があります。コレクション関係でも、橋本真之さんの作品増殖をしっかりと出来て、館としての課題を解決できたことはよかったなと思います。

大浦 地に足がついていますよね。遠藤さんにしても橋本さんにしても、将来的にもこの館として重要な作家なので、埼玉にある美術館の存在意義と関わっていく仕事だなあと感じて見ました。狭い意味じゃ

ない地域性とか、収集の方針とか、そういう必然性のある企画展や事業が続いていくと、館として筋が通っていきますよね。そういう企画展に、準備もしっかり取り組めると一番いいと思う。

渋谷 必ずしも展覧会がすべてじゃないけれども、やっぱり企画展を自分で最初から最後までやると成長できると思います。そういうことが簡単にできる時代もあったけれど、今はそうではない。

大浦 でも今、稀有なことに埼玉近美は予算も含め少しずつですがいい方向に行っていて、チャレンジできる。アイデアを出していいよっていう雰囲気は、有り難い部分もあるし、出さなきゃいけないという責任もありますよね。

吉岡 美術館のこれからの話でいうと、開館して 35 年経ち、開館当初に県ゆかりの日本近代作家の展覧会を担当していた上の世代の学芸員が退職を迎えつつあるので、お元気うちに近代作家の展覧会を開催して、ちゃんと引き継いでおいた方がいいと思っています。その一方で、それぞれがやりたいと思ったことを頭ごなしに否定されずにやらせてもらえる環境がこの後も続いて、これから入ってくる人たちもいろいろ挑戦ができる雰囲気があるといいなと思います。県立美術館のやるべきことがあって、学芸員のやりたいことがあって、そのバランスですよ。*3

大浦 館の事業を考えると、年間を通して何を見せたいのか、どうありたいのかっていうのが分かるようになるといいなと思います。いま徐々に、大きくはそういう方向になっていると思うので、それをちゃんと発展的につなげていきたい。そのためにはやっぱり我々の仕事の質をきちんと上げて、ちゃんと成果として残していくと、それがだんだんと積みあがって、それが徐々に館の特色とか、うちの館の色になっていけばと思います。

渋谷 これからの美術館については、残すべきものは残しつつ仕事を整理しながら、エッジが立ったような形にしていった方が、埼玉の特徴を受け継ぐことにもつながると思うんです。あと、アネックス(別館)が欲しいなあ…北浦和公園に…そのくらいの夢をもって仕事をしていきたいですね。

*1…担当企画展「New Vision Saitama V 迫り出す身体」展(2016 年)にて、出展作家と共に展示室に約 2 トンの土を敷き詰めた。(二藤建人《foot print》)

*2…担当企画展「遠藤利克展ー聖性の考古学ー」(2017 年)において、大量の水を使用する作品を展示。

*3…担当展覧会「原田直次郎展ー西洋画は益々奨励すべし」(2016 年)は、吉岡学芸員の企画提案からスタートし、当館を含む 4 館の共同企画として実現。美術館連絡協議会の 2016 年美連協大賞を受賞。

聞き手：Y.S.



左：吉岡知子学芸員(2008年より勤務)
中：大浦周学芸員(2013年より勤務)
右：渋谷拓主任学芸員(2008年より勤務)

この記事を読んだ人は、以下の記事を読んでいると思われま。開館 35 周年記念 美術館につとめてみたら …………… ④



右：五藤電子学芸員(2014年より勤務)
左：奥田悠学芸員(2015年より勤務)
現 ZOCALO #87
2017.12-2018.1月号
(2017年11月下旬発行予定)